

2020年11月23日(月)

老球の細道576号

### 偉大なコーチ山崎先生の思い出 PARTXI

会津バスケットボール協会 室井 富仁

米国大統領選挙の得票結果が発表されるたびに米国の州地図がテレビに映し出される。インディアナ州やケンタッキー州、そして「さびたベルト地帯」のデトロイトなどを見ながら当時を思い出して懐かしかった。私が知る米国人はおおらかだったが、現在の分断はどうなってしまったのだろうか。

#### ◆7月23日(木)

午前中は最後のクリニック。コーチ・マークはいつものように冷水と笑顔を準備して私たちを体育館で待っていてくれた。コーチはこの姿勢が大切である。選手を待たせない。

このクリニックにおいては、チームの課題であったゾーンオフェンスとプレスディフェンスを教えてもらった。目新しいことがたくさんあり、そのごのチーム戦術に多いに役立った。特にゾーンオフェンスでのショートコーナーを起点に攻撃する方法は目から鱗を落とさせてもらった。また、ハーフコート2-1-2ゾーンで相手を待っているながら、相手チームのボールがセンターラインを越えるやいなや突然ダブルチームでゾーンプレスに変化する。「マングース」とニックネームをつけて、ゲームの流れを変えるときによく使った。

コーチ・マークの熱心な指導で予定時間をオーバーして送迎バスを待たせてしまった。ミセスドライバーに遅れたことを謝ったら、ミセスがニッコリ笑って一言。「私にはお金はないが、時間はありあまるほどある」。当時のアメリカの田舎は実におおらかだった。

昼食を食べて午後2時からいよいよ試合開始。わがチームは2、3年生のAチームと1年生のBチームに分けて別々に試合をした。最初の試合はBチーム対南インディアナ州中学生選抜チームであった。相手は中学生といえども身長、ボールハンドリング、シュート力、リバウンド力で圧倒された。特に身長差は顕著だった。なにせ、わが1年生のBチームは平均身長が170cm未満で「会高マイクロキッズ」の愛称を携えていた。

アメリカチームは誰もが当時の能代工業田臥が5人いるくらいのボールハンドリングだった。わがチームで通用したのは金子君と大堀君のドリブルくらいであった。コテンバに負けたが貴重な経験となった。試合前のプレゼント交換、テレビ局の取材もまたしかり。試合の結果は下記の通り。

会津B 37-79 南インディアナ選抜(14~15歳)

会津A 51-95                   〃                   (15~16歳)

〃     35-64                   〃                   (16~17歳)

試合が終わったのが夜9時30分。終了後コーチ・ベネットを囲んでコーチ達の食事会をした。徳島城北の富田先生とたくさん話げできた。先生は米国遠征が終わると、秋に日本で開催されるアジア女子ジュニア選手権大会で全日本チームのアシスタントコーチでベンチ入りするというのであった。今日も刺激的な1日が無事終了した。                   <続>